

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 20 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520614

研究課題名（和文）新しい文法教育のためのリアル・タイムと場面の制約のある言語形式の基礎的研究

研究課題名（英文）Toward a new grammar education — the analysis of the characteristics of contextualized, spontaneously produced speech

研究代表者：澤田 茂保（SAWADA SHIGEYASU）

金沢大学・外国語教育研究センター・教授

研究者番号：00196320

研究成果の概要（和文）：本研究では、コミュニケーション能力養成を中心的な教育目標とする時代における文法教育の新しい方向性を提示した。ドラマ、映画、放送素材などのデータの分析を通じて、書かれた言語の分析を通じて構築された伝統的な文法とは異なる話された言語の文法があることを示し、話された言葉に広範囲に見いだしうる四つの特徴を示した。

研究成果の概要（英文）：This project offers a new perspective to the teaching of English grammar in a time when current teaching objectives center on the development of communication abilities. By investigating the characteristics of unplanned speech, mostly derived from TV and radio dramas, films, and broadcast news, this research shows that grammar for spoken language differs from traditional grammar, which is supposedly based on the analysis of written language. The project also provides four linguistic features that can be extensively observed in authentic spoken English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	300,000	90,000	390,000
2011 年度	400,000	120,000	520,000
2012 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総 計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：英語学、英語教育

科研費の分科・細目：英語教育

キーワード：文法教育、spoken language, 強調文、直接引用形

1. 研究開始当初の背景

平成 21 年度より全国で教員免許更新講習が始まり、英語科教員向けの『新しい言語観と英語教育』という講義を担当することになった。講習目的に「指導の背景となる専門的

な知見についての最新の内容...を取り扱う...」とあったので、中高での文法教育の背景となる有益な知見を提供すべきと考えて、特定の言語理論の紹介ではなく、伝統文法・学校文法をふまえて、spoken language

(以下 SL) を分析し、その特徴の具体例を示して、SL に対する文法的視点を提示した。

中高の教員に、written language (以下 WL) の文法に加えて、SL を理解する文法を示すべきと思ったのは、まず、中高での英語教育目標の変化により、オーラル・コミュニケーションへの傾斜が強まっているが、その時代に応じた適切な文法教育が行われていないと感じていたからである。生徒・学習者から見れば、英語を外国語としてみる文法的分析力が育っていないため、自律的な英語学習を発展させる基盤に欠け、大学入学後も十分な学習効果が上がらないことにつながっている。他方で、中高で教える教員の立場に立つと、自らが言語教育の専門家であるから、文法の必要性については十分理解している、しかし、教員自身が学んだ頃の英語教育の目標と現在の目標とずれているため、新しい教育の中での文法教育のイメージがつかめない、といった状況にある。教員自身が学んだ文法が「読むための文法」であったので、それは「話したり・聞いたりするため」には有効でない面がある。このため、コミュニケーションを目標にする英語教育には文法教育はいらない、という極論に至る教員すらいる。逆に、意識ある教員であっても、市販英語教材の中に「コミュニケーションのための文法」といったものを見つけても、SL の実態の十分な考察に基づいていないため、教員自身がよく知る WL の文法を弥縫的に焼き直したものでしかない、と感じる。そのため、新しい時代の要求に応えなければならない教員は、参考とすべき資料がなく、途方に暮れる。こういう現場の本当のニーズに応じてこそ、教員免許更新講習が教員管理ではない本当の意味を持つのではないかと考えた。

このような現状認識から、新しい英語教育の目標に沿った適切な文法教育とはどのよ

うなものか、という問いかけをして本研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述したとおり、新しい時代の文法教育に資する SL の文法の視点の構築（あるいは方向付け）にある。SL は概念上では多義的であるが、SL にあって WL にならない特性は「リアルタイム」と「場面」であり、本研究ではこの特性をもつデータを分析の対象とする。そして、音声データの分析で発見された事実を整理して、SL を文法的にとらえる理解のフレームを示す。

いま SL をリアルタイムで場面のある状況で発生する発話として理解し、WL と比較すると、SL には「余剰化」と「省略化」という一見すると相反する方向性が混在して観察される。この二つの相反する方向性を説明できる SL の文法の視点の提示を目指す。

リアルタイムと場面の特性は、言語使用の中で連結(interlocking)しているので、それらを分離することは本来できない。しかし、データの種類ではその強度に違いがある。インターロックな状態でも、リアルタイムの特性がより強く出ているデータとしてインタビューを選び、場面の特性が強く出ているデータとして、主にラジオドラマを選んで、それぞれに強く見られる特徴を分析する。

インタビューには、確かに話し手・聞き手が存在する場面があるが、そこでの言語使用は双方向的(interactive)というよりも、一方向的である。話し手は、その場で頭の中で生まれてくる思考内容を一方的に述べる。しかし、リアルタイムである。そのため、推敲されると消えてしまうような構造的な特性が強く出ている。

他方、ラジオドラマは、脚本家がスクリプトを作成しているので、確かに推敲が含まれる。そのため、真の意味でリアルタイムでは

ないが、リアルタイムなインタラクションを可能な限りまねることで、「場面」性を理想化してある。また、ラジオドラマなので視覚情報がなく、例えば、相手の発話に対するレスポンスなどが、実際の場面でノンバーバルな反応として発生する場合でも、律儀に（つまり、理想化されて）言語化されており、その意味で、発話の場面性を分析する場合は素材としては逆に有意義なデータである。

SLの持つリアルタイムと場面性という二つの特性がそれぞれ顕在化しやすい二種類のデータを利用して、SLの相反する「余剰性」と「省略性」という特徴の連関性を明らかにして、SLの文法の視点を提供することを目指した。

3. 研究の方法

言語研究の方法は、適切なソースからのデータの収集とその分析につきる。本研究では、教員免許更新講習の準備のために行った予備的研究を発展させることとし、種々の使用域から一定の基準で選んだ音声素材を収集して、100時間程度の音声と文字化したテキストのデータ・ベースを作成する。次に、データ・ベースをもとに、WLでは通常みられないが、SLには繰り返して発生しているパターンを探求して、WLに基づいた文法論と比較参照しながら、SLの特徴を探す。その際に、母語話者の聞き取り調査を併用して、観察された事実の分析の仮説・検証を行う。このデータの収集・分析・仮説・検証という手続きを経て、SLにおいて様々な観察される言語事実を統一的に説明する・理解するフレーム・原理を見いだす、という方法をとった。

なお、当初の研究計画では、スポーツ中継からデータ・ベースを作ることを構想していたが、ソースとして予定していたBS放送のスポーツ放送で原語音の放送がなくなったことと、スポーツ放送の英語はリアルタイム

だが極めて断片的で、また、場面性という点でも局在的でSLの分析に不可欠ではない、ことが判明し、データ収集を取りやめた。また、スクリプトの利用では、当初は映画も主な分析の対象と想定していたが、映画の分析では費やす時間の割には会話部分が少なく、むしろテレビドラマ、あるいはラジオドラマの方がデータとしては有用であることが分かったので、その分析に重点を移した。このような実際のデータ収集で明らかになった点は、今後の研究に活かして行きたい。

4. 研究成果

(1) 平成22年度：平成22年度は、「リアルタイム」と「場面」を持った言語素材として、主にインタビューを対象に次年度以降の分析のためデータを収集したが、その作業プロセスの中で気がついた言語学的に興味深い事象について学会発表を行い、また、紀要雑誌において別の内容を扱った論文を著した。

①学会発表について：WLでは決して現れないが、SLになると出現する言語形式 “That is [...X...] is that [...Y...]” に注目して、それが出現する発話分脈について考察した。母語話者は音声として「聞くだけ」では、この破格的構造に気づくことはなく、当初は単なる誤りの形式であると思った。しかし、素材データを詳しく見ると、繰り返して現れるパターンであり、何らかの意味があることが推測されたので、共通する談話分脈を考察した。

②紀要論文について：sayやtellなどを使用する一般的な直接引用形(direct quotation)に加えて、SLでしか発生しない特殊な引用形、“be like引用”や“go引用”の分析を行った。この形式もインタビューで繰り返して現れるが、WL化すると推敲のせいかわ消滅する。この言語事象には先行研究がアメリカに比較的多く、主として社会言語学での言語変化の事例として扱われていたが、WLに見られる

直接引用の一般的形式と比較して、SL の文法の中に位置付けた。

以上、平成 22 年度は、リアルタイムと場面性という二つの特性のうち、主として前者を考察した。

(2)平成 23 年度：平成 23 年度はもう一方の特性である「場面性」(聞き手を意識している対面状況)という条件下で発生しやすい言語形式の研究を行った。主に、TV ドラマ等のスクリプトの分析から、SL の興味深い言語事象について考察して、紀要雑誌に掲載した。

①紀要論文について：SL に特有な「強調(emphasis)」(話者の確信度合いを高める方法)について論じた。例えば、She is really a bad driver は副詞を使った単純な強調文で、WL でも見られる形式である。WL に基づく文法論では、このような「文」を分析の基礎におくが、SL の文法論は文を基礎とせず、むしろ伝えるメッセージが単位となる。そのためセンテンスの前後に書き言葉には見られない形式が現れる。とくに広義の「タグ」(付加形式)として、She is a bad driver, she really is といった強調形式について論じ、さらに、SL で見られる特殊なものとして、She' s a bad driver, that' s what she is. といった構造的には二文であるがメッセージとしては同語反復的である特殊な強調形式についても考察した。

言語学的な「強調」は、聞き手に対する話し手の発話の力を高める手段で、本来的に「場面性」に密接に関係している。眼前にいる聞き手を直接的に意識しているから、話し手が自分の発話の力(force)を高める。SL では、その流れの中に相手のレスポンスが組み込まれるので、タグとして強調形式が頻繁に現れる。先行文献調査では、タグの研究として統語構造的な分析があるだけで、本研究のような視点にたったものではなく、意義深い成

果があがった。

(3)平成 24 年度：平成 24 年度は、SL でのみ観察される統語的な節融合形式についての論文発表と、最終年度のまとめとして、全国レベルの学会が主催するセミナーで SL の文法論の教育への意味付けについての発表・講演を行った。

①論文発表について：節融合は母語話者自身も気づいていない SL での統語変容であり、大変興味深い現象なので、平成 22 年度の口頭発表で取り上げたが、今回は最終年度なので、よりデータを充実させ、出現する語用論的な文脈を分析して、論考の形にまとめた。

②発表・講演について：日本英語語法文法学会主催の第 8 回英語語法文法セミナーで講演する機会があり、grammar for spoken language (GSL) のモデル構築の概略を示した。具体的には、「場面に密着した定型表現」、「状況省略」、「タグ表現」、「強調形式」の四つの切り口で、spoken language の構造的な特質を示した。本研究の目的の一つであった GSL のモデル構築に一つの筋道を与えた。

本セミナーは、大学教員の他に中・高の現職教員や教員学生が対象であった。本研究の成果発表の目的の一つが教員研修等での還元があったので、その目的は一応達成できた。また、セミナーでの発表は「学習文法」への新たな視点を提供することであり、それは現在の英語教育で求められる方向性でもあった。そのためか比較的好評で、モノログ・シリーズ(研究社刊行予定)の一つとして出版される計画となっている。

以上、本研究での成果を概観したが、反省点や達成できなかったことがある。一つは、四つの視点について、方向性は十分に示したと思うが、研究に費やすことができる時間が限られており、個々の事象について踏み込んだ分析に至らなかったことである。また、そ

の他のリアルタイムで進行する発話の極めて構造的な諸相については、事例を整理したといった段階にある。また、当初の構想で、「左方転移」や「話題化」は実は SL の特徴として理解されるべきもので、これまでの英語研究へ新しい発想を導入することを目指したが、相当のデータが集まったものの、これらも事例の整理が終わった段階といった状態である。今後、個別の事象について、各個撃破的に取り上げて研究を深めることを考えている。

このような今後の課題は残しているが、本研究が目指した grammar for spoken language という新しい文法論の基礎的研究という観点からは、成果は十分にあったといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ①澤田茂保 「節の融合の形式と特徴について」、査読無、『言語文化論叢』17 巻、1-20、2013.
- ②澤田茂保 「Spoken English の強調形式について」、査読無、『言語文化論叢』16 巻、63-86、2012.
- ③澤田茂保 「はなし言葉と直接引用—real-time の発話での直接引用形について—」、『言語文化論叢』15 巻、査読無、1-26、2011.

〔学会発表〕(計2件)

- ①澤田茂保 「Spoken language からみた学習文法」、日本英語文法語法学会第8回英語語法セミナー、2012年8月6日、(大阪府)
- ②澤田茂保 「Written language の文法から見た Spoken language のいくつかの特徴について」、日本英文学会中部支部第62回大会、2010年10月16日、(石川県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田 茂保 (SAWADA SHIGEYASU)

金沢大学・外国語教育研究センター・教授
研究者番号：00196320